月刊 まちコミ 2003 4

●今月の注目記事●
・ 御蔵学校報告 （1-3ｐ）
・ 街人めぐり　青木寛さん （4-5ｐ）
・ 集会所建設に向けて （6ｐ）

●まち・コミインフォメーション●
まち・コミでは右のようなイベントを予定し,一般参加の方をお待ちしています。ご興味をお持ちの方はまち・コミ（078-578-1100）まで詳細をお問い合わせの上、是非お越し下さい。

5/9　19：00～
●遠藤勝裕氏(元日銀神戸支店長)御蔵へ
講演会を予定しています(テーマは未定)。 お誘い合わせの上、 お越し下さい。

5/下旬　●集会所建設作業始まる！？
スケジュールの最新情報はホームページをご覧下さい。 またお電話でもお問い合わせ下さい。 建設ボランティア、 大募集中です。

12th MIKURA WORKSHOP Report

御蔵学校　第12回　場所はこうして活かされる

震災から８年以上が過ぎましたが、御蔵には、区画整理事業で神戸市が買い取った市有地や、建物の再建が困難な狭小な敷地など数多くの空き地が残されたままです。第12回御蔵学校では、こうした空き地をはじめ、まちの空間の活用にスポットを当てました。第１講座で、まちの長期的な復興を展望するために、震災後、空き地が発生し、放置される状況を確認しました。第２～３講座では、空き地の活用の具体的なイメージづくりとして、御蔵で現在取り組まれているプロジェクトの成果や、他の地域で活躍されるアーティストに、まちの空間を利用したアート表現の事例を紹介して頂きました。また、空き地の活用の第一歩として、御蔵南公園予定地を利用したお花見コンサートを催しました。（報告：浅野智子）

●○●　第１講座　震災８年まちはどう変わったか　●○●

現在御蔵に多く残っている空き地は、震災後どのような経緯で家や事業所が再建されないままなのでしょうか。第１講座では、 土地や建物の権利関係と、 震災後の公的な復興支援の観点から報告がありました。 その後、 実際にまちを歩いて、 御蔵の空き地の現状を確認しました。

（１）空き地はどのように発生するのか（まち・コミュニケーション　宮定章）

震災前の路地は、 車は軽４がやっと通れる程度で生活の臭いがあった。 住民が信頼し、 鉄工などの仕事をまわしあって、 地域全体で産業を成立させていた。 震災で８割が全壊・焼失し、 多くの住民が戻ってこられない状況になっている。 その要因としては、第１に土地、 建物の複雑な権利関係があり、震災後、 借地借家層は自力仮設を建設する道が閉ざされ、 建物の本格的な再建が困難になっていったことがある。 第２に仮設住宅から震災前に住んでいた住民が、 地域の復興住宅に移転するためのプログラムがなかったことがある。 例えば、 区画整理事業と、 郊外に建設された仮設住宅の閉鎖の時期がかみ合わなかったこと、 そして郊外の市営住宅の入居者は御蔵の市営住宅への移転が認められないシステムが重なった。 このようにして御蔵での住民間のネットワークが絶たれている一方で、 被災した住民が生活を再建するために資金を投じて移転し、 そこで近隣関係や職業上でのネットワークを形成していく現状がある。 全体的には地域に住んでいた住民が戻ってこない現状が、 住民が地域に戻る意欲をますます失わせるような悪循環の構造がある。

（２）空き地の現状を確認

まちを歩いて、 多くの空き地が駐車場に利用されたり、 ロープなどで進入できない状況を確認しました。 参加者からは、「神戸市の空き地の管理には不備があるが、フェンスで囲まれるよりは住民が有効利用したい」「神戸市が区画整理で整備した事業用仮設を有効利用したい」 などの意見が出され、 空き地の活用に向けて、 官民含めた地権者の意向調査が必要だということが確認されました。また、「空き地の一時的な利用でも、『御蔵らしさ』が必要」や、「アーティストの支援」といった、空き地の活用方法についても意見が出されました。

12th MIKURA WORKSHOP Report

●○● 第２講座　まちで表現しよう　●○●

第２講座では、 集会所として再利用する予定の古民家を解体するプロジェクトや、 子どもの遊びや学習をテーマにしたプロジェクトなど、 御蔵のまちを舞台にした具体的な活動報告に加えて、 現代美術をテーマに幅広く活躍されている宮崎みよし氏から六甲アイランドの野外展などの事例を紹介していただきました。

（1）古民家解体プロジェクト（大阪工業技術専門学校　田丸一総）

まちづくり協議会が、 古民家を御蔵の集会所として再建することにした経緯は、 集会所建設に向けて、 市内にある多くの公民館を見学にいったがプレハブ建築は、 どこか味気なく感じた。 震災前に御蔵にあった木造長屋の雰囲気を伝えるために、 専門家のつてを得て、 香住にある古い民家を再利用することにした。（まちづくり協議会・田中保三）

大阪工業技術専門学校での説明会で学生に解体作業の協力依頼があった。 学生としては、 古民家を実際に解体することで、 建物の構造が学べるというメリットがあり、 60人以上の学生が夏休み２週間を利用して古民家の解体作業に参加した。 作業は、　民具などの運び出し、　母屋の解体、　母屋の内部にある蔵の解体、 の順に進めた。 御蔵で再建するため、 瓦などは袋に入れて大切に運搬し、 壁土も出来る限り採集した。

プロジェクトの期間は、 学生は体育館に寝泊まり、 自炊で、 学生同士の交流にもなった。 香住の住民は、 解体作業の開始当初は、 地域外の人が大勢入り込み、 騒がしくなるのではないかと抵抗感もあったが、 学生の作業風景を見て、 作業の終盤には、 挨拶を交わしたり、 畑の野菜の差し入れなどの心遣いもあった。 また御蔵の住民も、 学生や香住の住民にそば飯をふるまったり、 コンサートを開くなど、 地域間の交流にも発展した。

（2）子どもプロジェクト（学生ボランティア・川本昌司）

子どもプロジェクトは、 プラザ５のスタッフと学生ボランティアが、 平日の放課後や土曜日の午後に子どもの遊びや宿題、 科学実験などの世話をすることで、 子どもの健全な育成を目指している。 不況や震災後の生活再建が難しい状況の中で、 共働き世帯が増えている。 親や家族が、 子どもの遊びや教育に充分に面倒を見ることが出来ないことが多く、 地域全体で支援していく必要がある。 その一方では、 住民の関係が希薄になり、 地域の住民が子どもを注意すると、親同士の関係が悪くなるといったことも見られる。学生が地域に入って来ることには、子どもと年齢が近いため、 話が通じやすく、 子どもの遊びや教育に関するニーズを把握したり、 子どもの理解力にあった指導ができるというメリットがある。 これまでに段ボールアートや、 絵手紙教室、 農業体験、 カメラ作りなどさまざまな活動をしてきた。

活動の成果について、 講座に参加した地域住民からは、「子どもが遊びでのけじめや、 挨拶などができるようになった」、 「公園に子どもが来るようになった」 などがあった。 今後の課題としては、 「自分の子どもでもないのに世話をする気にはなかなかなれない」 といった意見もあったが、「住民とボランティアが、 子どもの教育のあり方や、 活動での協力について、 考えていく必要がある」 といった意見も出された。 また、 まちづくりの専門家からは、 「子どもがかくれんぼなどで遊ぶ場がない」 なども提起された。

（3）リ・フォープの挑戦（講演・リ・フォープ代表　宮崎みよし氏）

現代美術とは、 人が作品を見て楽しんだり、 作品と戯れたり、 そこからさまざまなことを考えるきっかけになるもの。 六甲アイランドでの野外展では、 六甲アイランドに震災後の仮設住宅が建設されたこともあって、 高齢者などが見に来ていたが、 巨大な３本の木の柱でできたアーチの作品を見て、「３本の木を組み合わせただけで、 こういうものができるのか」 としみじみ語られた。 また、 六甲アイランドは風がきつく、 地面に布の端を固定した作品では、 人が布の下に寝ころんだりしていた。

現在、 御蔵にある空き地は利用度が低い。 人が集うために手を入れていく可能性がある。 手作りには、 既製品にはない暖かみがあるが、 その反面、 どこか野暮ったさが残ってしまうことが多い。アーティストがデザインや施工の段階で技術的に支援していくことによって可能性が、 より広がっていくのではないか。

12th MIKURA WORKSHOP Report

●○●　第３講座　（アートでつながるまちづくり）　●○●

まちという、さまざまな人が出入りする空間で、アートはどのような可能性をもっているのでしょうか。第３講座では、詩人で、須磨区でギャラリー喫茶店を経営する福永祥子氏と、 三田市の商店街で 「三田青空美術場」を企画、実行してこられた東山嘉事氏に、震災や戦災などの破壊的な経験からの創作活動について講演していただきました。午後は、お天気にも恵まれ、御蔵南公園予定地でお花見コンサートを開きました。

（1） まちづくりにおけるアートの可能性 （詩人 ・ 福永祥子氏）

45歳から、主婦の表現の場としてギャラリー喫茶店を開いた。震災で家は半壊し、喫茶店を閉めることを考えたが、 近所の老夫婦が、 郊外の仮設住宅から、 ねこに餌をやりに被災地に戻ってくる姿を見て、 「人間は、 最も弱いものを慈しむことによって生かされる」ことを実感し、友人の薦めもあって喫茶店を再開した。

御蔵を含めて、被災地には空き地が多く、表面的な復興に留まっている。もはや住民個人で、生活を再建することはもはや不可能だ。復興に向けて、住民ひとりひとりがまちへの意識を高めて連帯し、地域全体で取り組むことが必要である。現在は、インターネットなどでなんでも手に入る時代だが、地域の外の人がその地域に行ってみたいと思うような吸引力、独自性をもったまちづくりが必要。

（2） 三田市事例紹介 （芸術家 ・ 東山嘉事氏）

震災や空襲の体験から、破壊から生まれる創造性、自然への畏怖を表現してきた。アートというのは、単なる癒しに留まらない表現であり、破壊に対抗し得るような毒気とも言える力を持っていなければならない。アーティストがイベントなどに介入する意義もそこにある。

三田市は、もともと地域がもっている潜在的な力がある。商店街間の対抗意識もうまく機能させながらイベントを盛り上げていくことが出来る。また、まち全体でイベントを盛り上げていくためには、多くの住民が参加できるさまざまな仕掛けが必要になってくる。例えば三田青空美術場では、360mの長さの布を商店街に拡げて、子どもやイベントの参加者が自由に絵を描き、それを幟にして川縁に飾った。また、アーティストによる作品の展示、仮装や踊り、音楽などがイベントにインパクトを与えている。

三田市青空美術場では学生がコーディネーターを勤めた。イベントを継続していくためには、公的支援も必要であるが、住民が独自で祭りを支える仕組みづくりが必要だ。

お花見コンサート

御蔵南公園予定地でのお花見コンサートでは、参加者が、ご婦人方に準備していただいたおいしい豚汁とおにぎりをいただきながら、光葉氏やlife is onceによるライブや、東山氏によるアートパフォーマンス、宮崎氏の協力による瓦とパンジーを使った花壇づくり、東山氏や福永氏も参加された２０mの布に絵を描く幟づくりを楽しみました。

感想

事例報告で「誰かが明確な目的をもって動けば、状況が動いていく」という言葉があった。空き地の再生には困難な局面も多いが、まちの長期的な復興を見据えながら、住民の空き地の利用ニーズを把握し、可能なことを実現していく可能性を感じた。

街人めぐり

神戸　新開地
青木　寛　さん

プロフィール：青木さんは昭和30年に新開地で生まれました。震災後は、まちづくり協議会三代目会長として活躍され、震災時には現場で指揮を執っておられました。最初の頃は新開地商店街で便座レース（ハッポースチロールで洋式便器を作りそこに一人が座ってレースをする）というイベントを行なうなど、ユニークな提案をされていました。今回は、楽しい発想を本当に実現させてしまうそんな青木さんにお話しを伺いました。（原稿・木山典子）

新開地の紹介：

新開地は、明治初期の頃は「湊川」の河川敷でしたが、同２９年に大洪水にみまわれました。その後、河川敷も埋め立てられ、新しく開かれた地を「新開地」と呼ぶようになりました。いつのまにか、劇場・映画館、商店、遊技場が建ち並び、関西随一の繁華街・文化村となったそうです。しかし、商業の中心が三宮に移転してからは衰退してしまい、その後、もう一度商店街に賑わいを取り戻そうと力を注いでいます。

新開地のまち：

新開地は昭和５０年頃から商店街が衰退し、人通りが少なく暗くて怖い街になってしまいました。そこで、まちを明るく元気にさせようと昭和５９年に「新開地周辺地区まちづくり協議会」が設立され、最初の活動として、暗くて怖いイメージを捨てるために新開地商店街のアーケードの撤去とモール化に取り組んだそうです。平成１１年には「新開地まちづくりＮＰＯ」が設立され、まちの活性化を目指して現在もいろんな活動をされています。また、平成３年に「アートビレッジ構想」が策定されました。これは、新開地がかつて持っていた文化・芸術の本拠地としてのイメージを現代的なスタイルで復活・発展させ、まち全体が神戸の文化創造の拠点となる「育ち・ふれあうアートのまち」をつくり出していこうとするものだそうです。１９９６年には音楽、演劇、映画、美術などの芸術を楽しめる「アートビレッジセンター」が設立され、いろんな展示やイベントなどがされています。また、芸術家やミュージシャン、まちの方が一緒に活動でき、楽しみながら学び、遊び、コミュニケーションを深め、ネットワークを広げられる場として多くのイベントを行なってきました。代表的なイベントとして「新開地ミュージックストリート」「新開地アートストリート」が行なわれていますが、参加した方や訪れた方が、このまちで新しい自分を発見し、感じ、挑戦をはじめてくれることを目指しているそうです。一方、街並みについては、平成５年に「建築デザイン誘導制度」が生まれました。この制度は「アートな建築デザイン」を創造することを目的とし、延べ床面積５００㎡を越える建築は、地元・神戸市・専門家が一緒に話しをしながら外観のデザインを考えていくというものです。今までの例としてアートビレッジセンターやボートピア、ラウンド・ワンなどがあります。新開地商店街にはいろんなアートが隠れ潜んでいます。「ここはクイズみたいな街や」と青木さんは言っていました。帽子をかぶったギャングのシンボルゲート・モニュメントや川をイメージして造られたモールなど、買い物ついでにアート探しをしながら歩くのも楽しいんじゃないかなと思います。新開地は「個性の見えるまち」だと商店街を歩い

青木さん→

て感じました。ただ、買い物・食事をするためだけに歩くのではなく、ちょっと寄り道をしてみると他のまちにない何かおもしろい発見ができるのではないでしょうか。これからも、新開地のカラーを大切に元気で笑顔あふれる街であってほしいです。

キネマ横丁：

キネマ横丁は、神戸市が所有する映画館跡地を新開地まちづくりNPOが借り受け、三年間という期間限定で建てられた仮設店舗です。「短期間でお店の経営を習得して独立する」をコンセプトとして平成１５年11月にオープンしました。建物は勿論のこと照明や内装も各店舗のイメージに合わせて工夫されています。建築家の森崎輝行氏、飲食店プロデューサーの玉田智士氏を初め、専門家の協力を得てつくられたそうです。そんなユニークな雰囲気のキネマ横丁には、新人店主が活躍するオシャレな店が三店舗（鶏肉創作料理店、ショットバー、串焼きホルモン店）入っており、入り口付近にはフリースペースとして活用できるキネマギャラリーが設けられています。このプロジェクトの一番の目標は「新開地に新しい流れを作ること」だそうです。夜には建物や木がライトアップされ、若者の集まる場所になるのではないでしょうか。ただ、私が昼間に通りがかった時は扉が閉まっていて、夜の賑わいが昼の時間に想像できないのは残念でした。せっかくできた新しいオシャレな空間なので、昼間ももっとオープンにみんなが自由に楽しめる空間として利用できればいいなと思います。

青木さんが想うまちづくり：

青木さんは「自分のまちが好きやから真剣にまちのことを考えてる」「まちを良くしようと思ったら、新開地だけを考えてたらあかん。いろんな場所に行って、いろんな人と出会うことも大切なことや。新開地のカラーを歴史から見つけ出したい。」と話してくれました。そして、新開地ができて約１００年たった今、家庭にある写真などを集めて１００年誌を作りたいそうです。しかし、予算的な面で実現への道は遠いようです。

これからの課題：

ひとつめに、兵庫区には高齢者が多く住んでいます。今の新開地があるのもそんなお年寄りたちが頑張ってきたお陰。だからこそ高齢者のために弁当宅配など何かできることはないか検討中だそうです。でも、マンションが増え続ける今日では、隣近所とのコミュニケーションが薄くなってきています。そこをどう繋げるかがこれからの一番の課題だという声が聞けました。

■　御蔵通5・6・7丁目集会所建設に向けて　■

月刊まちコミの2002年7月号に紹介されている民家解体。住民、建設ボランティアとして総勢100名弱が参加し、香住町安木村に建っていた民家を解体してから8ヶ月が過ぎようとしている。御蔵の集会所建設の新しい動きを紹介する。

2003年4月2日、神戸市都市計画局と土地の賃貸契約が締結された。都市計画局より一時は明示された敷地であったが、“公平性”という理由から面積を減らすことが出来ないかと打診があった。民家は、香住で建っていた時の姿をそのまま再現しようと計画していた。民家は、土壁の外側を杉板で覆われ、軒裏も化粧で垂木に野地板が現れていた。この地域で建設しようとすると隣地境界（隣の敷地との境界線）からの距離が短くなると防火的に建てることが出来なくなる。明示された敷地は、隣地境界より法的な5.0mを確保していた。小さくされると3.0mとなり、元の姿では建設が出来なくなる。地域としては前の持ち主の方に、「思いの詰まった家が神戸の御蔵に来れば再会できる」と伝えていたこともあってどうしても譲れなかった。地域の女性方も、町づくり活動や集会所の運営方法など想いを伝えにたびたび足を運んだことも大きな力となり4月2日を迎えることが出来た。

土地の契約が結ばれたことで集会所の建設が前に進んで行くことができる。4月3日には土地区画整理法76条申請書、福祉のまちづくり条例、埋蔵文化財届出書、建築確認申請書などを提出し、今は審査中である。また、工事施工者の選定を含めて工事金額の調整を行っている。申請手続きに工事金額が決定されれば、安心コミュニティー設置補助の申請がある。補助金額決定交付通知があった段階から工事着工が出来る。この工事の施工者は、集会所の建設だけを受け持つのではなく、住民や建設ボランティアの参加を理解し協力体制を作って行かなければならない。工事期間中の問題も含めて積極的に対応していただけることが最優先とされるので金額もさることながら難しい選択である。

抱える問題が一つある。運転資金の調達である。事業費としては、復興基金からの補助金が最高3000万円と御蔵通5・6丁目町づくり協議会が持つ800万円を加え3800万円と考えている。3000万の補助金は、建設工事が竣工し実績報告書を提出してから二ヶ月後となる。施工工事期間中に支払われる前払い金、中間金を支払うことが出来ない。施工工事者の負担を強いるとしても施工者は金利を払うことになる。金利は安くとも百数十万円からのお金を支払わなければならず、余力のある工務店にお願いをするか地域で資金を作り運転させていくことしか考えられない。現時点では、目一杯の事業費であるので金利分を負担し支払うことは考えにくい。なんとか、地域で資金を作り運転していけないかと模索を行っている。

八月の解体工事後、昨年から九月の解体材運搬、解体材の調査、建設に向けて土造りに竹取り、木材の伐採・製材と多方面の方にお手伝いを頂きながら建設工事に向けて活動を継続している（詳細は月刊まちコミ参照）。今年も、4月19日土曜日の午前中に民家から持ってきた瓦の選別作業を実施した。淡路の瓦師、山田脩二氏の助言を元に屋根工事をされている兵庫区にある屋根源の赤澤氏、山下氏の指導のもと住民に建設ボランティアで大阪工業技術専門学校の学生の手伝いを得て650枚の瓦の選別を行った。形を見、音を聞いて風雪に耐えた瓦の強さを感じることが出来た。5月8日には建設ボランティアとして参加してくれた大阪工業技術専門学校に再度、参加のお願いに行く。

解体は、無事に終えることが出来た。120年の時間を経て村の子供が集まったと聞いている家が集会所として建設される。御蔵の町は、無機的な材料で形作られようとしているなかで手の温かみの感じられる豊かな場ができることを期待している。

待ちに待った建設工事の槌音がまちに響くようになる。

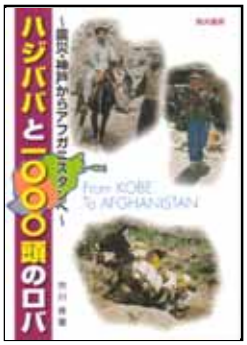
2002 8　○解体工事
9　○解体材運搬
10　○土造り
○解体材調査
○竹取
11　○木伐採
○土造り
12　○木製材
2003 1　○模型づくり
2　
3　
4　■敷地契約
□各種申請手続き
5　□補助金申請
6　■工事着工
7　
8　
9　
10　
11　
12　
■工事完成
2004 1　■竣工式

▲乾いた土からの土造り

▲木材伐採

▲泥中の土造り

まち・コミおすすめＢＯＯＫ
「ハジババと1000頭のロバ ～震災 ・神戸からアフガニスタンへ～」



市川　斉　著

筒井書房出版　定価１５００円＋税

社団法人シャンティ国際ボランティア会　（SVA）の職員である市川さんが、２００２年1月以降3回にわたってアフガニスタンを訪れ、自身が見て、聞いて、感じたことを報告した本。日本での報道では知り得ないアフガニスタンの生の状況、生活者の姿を、優しい語り口で綴っている。

タイトルの「ハジババ」は、現地での市川さんのニックネームだそうだ。「ハジ」はメッカ巡礼を済ませた人に対する尊称、「ババ」は尊敬に値する人という意味だとか。市川さんが現地の人々にとってどんな存在であったのかは、ニックネームから十分に想像できる。

市川さんは２００３年1月から現在もSVAのアフガニスタン・ジャララバード事務局長として現地での支援を続けておられるが、本書のあとがきには向こう2年間の長期滞在をするにあたって「理想かもしれないが、自分の子どもと同じようにアフガニスタンの子どものことを真剣に考えることができるよう努力したい。」と気持ちを述べている。市川さんの人柄だろう。本書でも具体的な人の名前、そして子ども達のことが多く登場する。

アフガニスタンの現状とともに、緊急支援の必要性、そして市川さん自身を知ることができる本である。

大地のつぶやき

～雇用機会の不平等～

まち・コミは神戸市地域コミュニティーパワーアップ事業に則し、雇用創出事業の一翼を担い、ワークショップの運営を支援する人材や地域活動の人材不足を補い、まちづくりの活性化を図ろうと目論んでいる。最長６ヶ月未満の雇用とは言え「地域アシスタント」「ワークショップ隊」としての活用は、まちづくりにとってありがたいことだ。この募集に対して学卒、院卒の応募があった。若者の就職難も聞かれて久しいが、現実に面談して求めているものも普遍的なものなのに機会の平等さえ与えられていないのに驚いた。若者に夢や希望を与えるのが我々年輩者の責務である筈なのに、今はそれが失せかけている。若者たちは決して狭い考え方をしている訳ではない。否、かえって幅がある柔軟で真摯な考えを持っている。それだけに彼等と接していて将来に展望のない社会では我々年輩者の存在価値さえ問われている様に思う。

卑近な例で恐縮だが、三十数人の当社もご多分に漏れず、この四年は減収減益を繰り返している。そのためこの二年、高卒採用を控えている。震災前の五十五才停年が、震災後五十七才、そして行政指導により六十才へと停年延期をした。そして今年、六十才で停年を迎える者が出た。ここで打ち切って新卒をとるべきか、それとも嘱託で継続雇用すべきか、本当に迷った。中型幹部クラスとも相談した結果、嘱託を選んだ。この判断は間違っていないと確信していたが、こうも若年者が就業に苦しんでいるとは思わなかった。企業の業績が第一と考えるのは当然だが、それが果たして社会的弊害をもたらしているのではないかと疑念が湧いている。若年者の就労機会の平等すら与えていないことに結びつくのなら考えを新たにしなくてはいけないが、この調和がむずかしい。天職が何であるか知らないけれど、年齢を問わず、職がない程不安なものはない。人間の尊厳さえ奪われていると言っても過言ではないだろう。

株式会社兵庫商会　田中保三

公団まちづくり研究会
「我らまちおこしお助け隊～赤い糸のネットワーク～」

講師：大 塚 映 二
（当時は、都市基盤整備公団関西支社市街地整備第一部。現在は神戸市垂水区役所でまちづくりの支援業務に携わっている）

神戸市の中央区から兵庫区にかけての海際にある下町＝西出・東出・東川崎地区において、ひとりの行政マンとして、住民や学生達とまちおこしに取り組んだ経験を語る。

■潮の香りと歴史をたどるウォークラリー

このまちおこしイベントをやる背景には、次のことがあった。

それまでの数年間は、震災の教訓を大義名分にして道路整備と共同建替を重要課題として住民と協議を重ねてきた。最初は住民の総意としてかなり積極的ではあったが、震災の混乱から脱して生活が落ち着いてくるに従って、現状肯定派の声が強くなり、事業化のめどが立たなくなってきた。

一方で、がむしゃらなハード整備だけでなく、地域の特性に応じたまちづくりを進め、地域の結束を高めることが結果的に強いまちづくりにつながるということも、震災の教訓からも強調されていた。

そこで注目したのが、地域の歴史である。昔の兵庫と神戸の間に形成された町であり、歴史的まちなみの雰囲気もまだ残っている。追い風になったのが、司馬遼太郎の歴史小説「菜の花の沖」のテレビドラマ化であった。主人公高田屋嘉兵衛が本店を構えたのが西出町であり、町の人々には偉大な先輩として語り継がれていた。そこで町に「歴史を活かしたまちづくり」の立ち上げを促し、まちづくり協議会の中に「入江の歴史委員会」ができた。

それでも住民たちは何をしていいものかとまどっていたので、３点セットの取り組みを呼びかけた。一つは、自分たちの勉強の場を設けること＝「歴史講演会」の開催。二つ目は、わがまちの史跡を洗い出すこと＝「史跡マップ」の作成。そして三つ目は、自分たちの町の歴史を外にアピールすること。

前二つは住民に割合にスムーズに理解されたが、最後の提案は半信半疑だった。「こんな町を誰が見に来るものか。」という自嘲めいた発言もあった。したがって、三つ目の提案＝歴史ウォークラリーは、私自身が中心となってイベントに仕立てて住民に見本を見せるしかないということで、半ば強引に開催を決めた。

そんな経緯で開催を決めたものだから、当然どこにも実行予算はない。そこで活用したのが、翌年開催されることになっていた「すまい・まちづくりフェア」（２１世紀復興記念事業の一環行事）のプレイベントに位置づけ、そこから経費を捻出することと、震災復興基金の「まちづくりアドバイザー派遣」制度を利用することであった。この二つで経費のめどがついたので、実行に移した。

歴史を活かしたまちづくりを進めるとともに、新しい活力を入れようと考えた。そのやり方として思いついたのが、学生たちをまちづくりイベントに引き込むことであった。

幸いなことに、隣の新開地で、その年の冬に「新開地ええとこデザインワークショップ」というまちづくりイベントを成功させており、これに学生たちも参加してくれていたので、こっちにも引き込もうと考えた。学生がこの地区に関心を持ってくれるかどうかは自信がなかったが、ともかく話をして現地も見てもらうことにした。新開地のワークショップで出会った神戸芸術工科大学の学生に話を持ち出したところ、興味を示してくれ、仲間を集めてくれた。あとは、彼女たちの興味を逃がさないように気をつけながら、住民にもわかりやすいイベントに仕立てることに気配りした。

その時は、住民たちが学生たちといっしょにできるとは思っていなかったので、私が両者の間を行き来しつつ準備を進めることにした。いわばブリッジ（橋渡し）方式である。

結果は、上々であった。およそ４００名の方が来てくれた。久々に町に人があふれたのである。これで住民の意識は変わった。結構誇れるまちなんだ、住宅局も粋なことをやるじゃないか、などなど。

このウォークラリーは、住民と行政と学生という組み合わせ、三者がともに汗を流す仕組み、外部へのアピールなどの点において、それまで当地区で進めてきたまちづくりとはまったく違った形のまちおこしイベントとなった。またこの成功がきっかけとなって、次々と新しいプロジェクトが進んできたことを思えば、当地区のまちづくりの転機とも言うべき大きな意義のある取り組みであった。

■まちなか倶楽部の建設

協働のまちづくりを言葉の上だけでなく、本物の汗を住民と市職員その他がいっしょにかくプロジェクトをやりたいと思っていた。そのために、自分たちで小さな建物を造ろう。

ヒントは、その前年暮れに聞いた「N氏別荘」計画である。コンサルタントのN氏が、リタイヤ後の生活拠点とする建物をセルフビルドでつくる計画である。また、高校時代の友人が、仲間達とログハウスを自力で造ったのをその夏に見せてもらったことも強く印象に残っていた。

私はこれを「まちなか」で「まちのなかまたち」でやろうと企画書を書いた。もちろん本気で実現するつもりでいたし、準備は着々と進めていたが、地元に提案したのは相当後になってからであった。なぜか？住民に経験がない中で提案するのはとうてい理解を得られないと判断したからである。それで、まずはラリーを確実に成功させ、住民の信頼を確固たるものにしてからという順番を踏んだ。同時に、神戸市としての予算取り、土地の手当て、キーマン（親方など）の選定、材料や機器の手配を並行して進めた。このあたりの手はずが整った時点で、町に提案した。

建設方式は、文字通り協働のまちづくりを実践すること、住民も市職員もいっしょに汗を流すことを前面に打ち出した。学生には引き続き大きな役割を果たしてもらうことにし、最初から建設チームに組み込んだ。学生自身、現場体験をする貴重な機会になると思った。

開館後の＜日本で一番小さな博物館＞としての継続的な使われ方はうれしい誤算である。当初はたまには展示会なんかもするだろうが、いずれカギがかかったままの状態になりはしないかという危惧を持ちながらの建設スタートであった。使われない場合は、市職員の現場休憩所として使わせてもらうつもりだったが、残念ながらその目当ては外れてしまっている。住民が自分たちで汗を流してつくった建物ゆえに魂がこもったのであろう。

■まちのリズム場所のリズム

歴史委員会の立ち上げ以来の構想を発展させて、まちなか倶楽部を拠点とした「まちぐるみアート構想」をこのイベントの１年前に立案した。空き倉庫や史跡などをアートを切り口に活用したいという思いである。

一方、まちなか倶楽部で行う催しも半年くらいで息切れになるだろう、そのてこ入れのためにも、春にはイベントを打ち上げるべきだと考えていた。さらには、芸工大というデザイン系の学生達にまちに入ってもらったのに、デザインで力を発揮したいという思いを押さえ込んでしまったかなという気がかりも感じていた。

その３点から、いずれにせよ２００２年春頃にはアートを切り口にしたイベントをやった方がいいと思っていた。

このイベントに関していえば、まちに対する外からの刺激でもいいと思った面があり、学生に企画から実行まで任せて進めることにした。学生達は、自分たちの企画を実行できるとあって、全力を挙げてやってくれた。正直なところ、あれほどの大イベントに仕立て上げた実行力は目を見張るものがあった。また、地域の隅々にまで入り込む行動力もすばらしかった。

残念ながら、住民達にはこのイベントの意義はほとんど理解できなかったと思う。学生達がにぎやかなことをやってくれているというくらいの認識ではなかったか。イベント当日は、おおぜいの方々が見に来てくれたので、学生さんはよくやってくれたという感謝の気持ちは芽生えただろうが、自らの成果としては受け止められなかったのではないかと思う。

「まちのリズム場所のリズム」は、参加者２千名超でイベントとしては大きな成功を収めたし、地域の持っている場の力を発見することができた。空間活用の今後の可能性を示すものとして大いなる実験であった。

が、地域のまちづくりという面から見れば、課題も浮き彫りにした。主体の問題。まちづくりと位置づけるかぎりにおいては、中心は地域の住民が担うべきである。 協働の問題。主体性と一体の関係であるが、地域主体のまちづくりという意味でいえば、学生との関係は、住民が主体性を持って、その意図・指図のもとに学生達を使う“ずるさ”を身につけるべきであろう。オルガナイザーの必要性。住民が主体的に動くと言っても、現実には外部の人間までもうまく動かせるわけではない。特に、学生とは経験・年齢差などに相当の隔たりがあり、意思疎通はむずかしい。やはりその間をつなぐ専門的技術を身につけた組織者（コーディネーター）が存在しなければならない。

最後に、個人的な思い。まちなか倶楽部の時もそうであったが、自分で企画して根回しをしておきながら、日陰の存在であるというのはまったくつまらない。私の欲求不満は大きくなっただけかもしれない。（実は、この悔しさが菜の花プロジェクトにつながる。）

■菜の花プロジェクト

アートイベント「まちのリズム場所のリズム」の１年後は、菜の花をテーマにしたイベントで湊町線開通を飾ろうと決めた。もちろん私ひとりが心に決めただけであるが。

なぜ、菜の花か？こじつけなのだが、高田屋嘉兵衛を主人公にした司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』にあやかれば、あの地域では間違いなく受けることは想像できた。それと単純にきれいな花であること。そして何よりも、誰にも取り組めること－当時、アートイベントをバックアップしながら、住民には理解することがむずかしいなぁと思い悩んでいたので、「簡単である」という基本を大切にしようと思った

２００３年春は、湊町線開通という町にとって大きな転機であるとともに、私自身がこの町から身をひくことになるはずだと思っていた。自分の花道を自分でつくりだしてみたいと思った。やるからにはまちじゅうを菜の花で埋め尽くす気構えで、徹底的に大々的にやるつもりでいた。自分が先頭にたって指揮を執りたいと思っていた。（アートイベントの際のくやしい思いもあった。）仕掛けにも、先頭にたって旗振りをすることにも自信はあった。

菜の花プロジェクトでは、これまで培ってきた人とのつながりがおおいに活かされた。ノウハウの伝授から労力の提供まで、人のネットワークの力でもある。

やっていることは花を育てるという簡単な取り組みであり、誰でも参加できる。この単純さは大きな武器である。これまでまちづくりというと敬遠してきた方々も参加してくれている。その方々との対話の中から、町への思いやまちづくりの意味について語っていけば、理解は広がると思う。信頼関係を培っていく中で新たな展開も見えていくものと確信している。

これは、結果も求めるが、過程そのものをまちづくりとして位置づけるプロセス重視のまちづくりである。その意味では、まちなか倶楽部などの一連のプロセス型まちづくりの延長線上に位置づけられるプロジェクトでもある。また、人のネットワークをフルに活用する点においても、いろんな人々が活躍するこれからのまちづくりのあり方を模索するものとして高く評価していいと思う。

■三町に関わってきた中から感じたこと

私は、特定の地域や特定のまちに対して特別な思い入れはない。まちづくりを職業とするものとして、それぞれのまちがどうあるべきか真剣に考え、その思いをぶつけているに過ぎない。押しつけるつもりもない。そこに住み、生活する人たちが自分たちで決断して進めるものだと思っている。

月並みな言葉になってしまうが、次世代の人々に誇りを持って引き継げるまちにしてほしい。そういう観点からわがまちを見つめ、まずいところにはメスを入れ、伸ばすべきところは育てていく、それを住民自らが判断できる力を育んでほしいと思っている。

また、住民だけでなく、行政や専門家、さらに学生達までも含めて協働の取り組みを進めることのできる組織力を養う必要がある。そのための若いリーダーよ出でよ！また、足の引っ張り合いをしないで、いい面を育てる度量を人生の先輩達は持たなければならない。

このまちを担当した当初は、自分がどんなスタンスで関わっていけばいいのかおおいにとまどった。それまではどちらかといえば、行政対住民という対立構造の中で物事を進めていた面が強かったが、このような任意のまちづくりにおいては、そのような構図では進まないことがわかってきた。

では、どうするか？自分が行政の枠から一歩踏み出すしかない。それで初めて、住民の気持ちが少しはわかるようになった。このあたりは、公務員として微妙な問題を含んでいるが、はみ出し公務員もいいものだと思えるようになると、あとはどんどんと住民の中にはいることができたように思う。最初の苦労があったからこそ、その後のいろんな展開が可能になったのではないかと思っている。私の中では、仕事と地域活動との境界がなくなりつつある。

■このページは、 まち･コミが公団まちづくり研究会に委託され、提供しています。

まち･コミ活動報告

3月

2/28～3/5　台湾交流旅行
3/2　宮崎みよし氏
エクトル ・シエラ氏来御蔵
3/4　父親サポート関西中原氏来御蔵
3/5　神戸長田コンベンション協議会
打合せ
3/5　集会所打合せ
3/5　三田訪問(御蔵学校)
3/6　山田工務店社長と集会所打合せ
3/6　まち協打合せ
3/7　ﾌｧﾝﾄﾞ打合せ
3/7　修学旅行打合せ
3/7　NPO協働フォーラム参加　(大阪)
3/7　コンテナアート打合せ
3/8　レスキューストックヤード講演
3/10　コンテナペイント打合せ ・実験
3/10　御蔵学校講師依頼
3/10　御蔵学校打合せ
- - 子供プロジェクト
3/12　コンベンション協議会打合せ
3/12　古民家 - 木村氏さん来訪
3/12　バリアフリーマップ打合せ
3/13　青池監督来訪
3/13　CPU事業 説明会
3/14　台湾参加者食事会
3/16　御蔵学校打合せ
3/17　コンテナペイント打合せ
3/17　御蔵学校打合せ
3/18　三田-- 東山氏アトリエ見学
3/18　OCT説明会
3/19　SVA市川氏出版記念 ・送別会
3/20　三重東員中学校説明
3/21　東山氏作品移送作業
3/26　公団勉強会
3/27　消防庁講演-- 東京
3/27　市民社会推進機構　台湾報告会
3/28　集会所打合せ
3/29　御蔵学校
3/30　御蔵学校
3/31　町づくり協議会
3/31　まちコミ打合せ
3/31　集会所瓦運び

ご支援、ありがとうございます。

3月3日～3月31日

●賛助会員(新規･継続)●

仁義茂(兵庫県)　加藤晃規(兵庫県)　寿松木宏毅(秋田県)　北野泰成(福井県)　松永英次(兵庫県)
平世圭子(兵庫県)　新保隆久(三重県)　福永祥子(兵庫県)　播本高志(兵庫県)　和田幹司(東京都)
小林宜英(兵庫県)　吉川俊雄(山口県)　清水一郎(東京都)　中田実(愛知県)　東垣一臣(兵庫県)
武田則明(兵庫県)　宮下克己(兵庫県)　高井秀樹 ・由水(兵庫県)　石東直子(兵庫県)　高宮城幸雄(兵庫県)
横田尚俊(山口県)　鈴木有(秋田県)　オーユーアール都市開発機構(大阪府)　日本精機㈱(大阪府)

●募金●

●協力●

社団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都)　株式会社兵庫商会(兵庫県)　【順不同･敬称略】

新規賛助会員募集＆更新のお願い

まち ・コミでは、さらに活発に活動を行うため、賛助会員を募集し金銭面で支援していただいています。まち ・コミを運営していくにあたって、最低限必要な費用を助成金だけでまかなうには、限界があります。賛助会員のみなさまには、会員特典をご用意しておりますので、ぜひ賛助会員への登録をお願いいたします。

また、賛助会員は１年更新とさせていただいていますので、現在賛助会員の方も時期がきましたら、更新をお願いいたします。

賛助会員になると…

◆本誌　月刊まち ・コミ」が送付されます。
◆まちづくりについての自由闊達な情報交換 ・意見交換の場(メーリングリストなど) に参加できます。
◆まち ・コミ関連の催しへの参加料が割引されます。
◆まち ・コミ関連の出版物の購入費が割り引きされます。
◆まちづくりなどに関する様々な相談に、まち ・コミスタッフが応じます。

よろしくおねがいいたします。

年会費

個人・法人　年間５０００円
学生　年間３０００円

郵便振替口座番号

００９５０－３－４２７８８

口座名称

「まち・コミュニケーション事務局」

■編集後記　今年度の目標は、体を鍛えることに決定！(亀谷)　今回から、郵送方法が変わりました。いかがでしょうか？＞読者のみなさま(戸田)

２００３年４月１日発行
編集／発行 まち･コミュニケーション
定価　１００円

御蔵事務所　〒653-0014
神戸市長田区御蔵通5 - 9 2 - 2　みくら5　１０１
TEL　078-578-1100 ／FAX　078-576-7961
東京事務所　〒162-0052
東京都新宿区戸山1 - 24 - 1
早稲田大学文学部浦野研究室内
神奈川事務所　〒214-8580
神奈川県川崎市多摩区東三田２丁目１ - １
専修大学文学部大矢根研究室内
e-mail　m-comi@bj.wakwak.com
http://www.bj.wakwak.com/~ m-comi/index.htm